

		[7]
氏 名	橘 悠太	たちばな ゆうた
博士の専攻分野の名称	博士（文学）	
学 位 記 番 号	文博第 260 号	
学 位 授 与 の 日 付	2019 年 3 月 31 日	
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当	
学 位 論 文 題 目	中世後期の醍醐寺三宝院と公武権力	
論 文 審 査 委 員	主 査 教 授 原 田 正 俊	
	副 査 教 授 西 本 昌 弘	
	副 査 教 授 黒 田 一 充	

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、中世後期における醍醐寺三宝院が、公家・武家権力との関係の中で如何なる地位を築き展開を遂げたのかを明らかにしたものである。醍醐寺は真言密教の有力寺院として平安時代以来、勢力を誇るが、一権門寺院に過ぎなかった。しかし、中世後期には賢俊・満済など室町幕府と密接な関係を持ち権力を振るった僧侶が出たことで知られている。

これまでの研究の多くは、賢俊・満済の時期を主に検討してきたが、三宝院が門跡に転化する南北朝中期から室町初期への展開過程は十分研究されてこなかった。本論文では、公家・武家・寺院社会での三宝院の役割・活動を具体的に明らかにすることを目的としている。また、三宝院が相承した所職・所領について、これらが集積される過程を明らかにしようとした。特に醍醐寺三宝院院主光済の在任期を中心に公家・武家・寺社との関係、所職・所領を介した地方寺院との連携を論じている。全体の構成は以下の通りである

序論

第一部 南北朝期の醍醐寺三宝院と公武権力

第一章 醍醐寺三宝院光済と室町幕府

第二章 醍醐寺三宝院院主と北朝公家社会

第三章 醍醐寺諸院家と三宝院一院家支配と法流相承を中心に―

第二部 醍醐寺三宝院と地域社会

第一章 南北朝・室町期における醍醐寺三宝院と根来寺

第二章 中世後期における醍醐寺三宝院と伊勢国太神宮法楽寺

第三章 常光寺と地藏信仰―「常光寺縁起」の分析を中心に―

結論

序論では、中世後期を中心とした宗教史の先行研究および醍醐寺三宝院に関わる研究を整理し、①三宝院の中世後期における展開を考える上で最も重要である門跡転化の時期にあたる南北朝中期から室町初期への展開過程が不明確である点、②公家・武家・寺院社会での三宝院の役割・活動の具体的な解明、③三宝院の相承した所職・所領の形成経過が不明確な点を課題として取り上げた。

第一部第一章では、醍醐寺三宝院光濟と室町幕府の関係について検討している。中世後期における醍醐寺三宝院と室町幕府との関係は、院主賢俊が室町幕府を開いた足利尊氏と密接な関係を有したことに始まるとされるが、両者没後の検討は未解明な部分が多かった。そこで、賢俊以降の醍醐寺座主職の変遷を検討し、その結果、院主光濟期には南北朝内乱の中で北朝・幕府方への忠節を示すことによって、將軍足利義詮と三宝院との関係が再形成されていたことを示した。また、光濟期の三宝院が幕府内において担った役割は、以後の三宝院院主が担っていく役割であり、光濟期は三宝院が幕府の政治・宗教政策内に明確に位置づけられた画期的な時期であったことを明らかにしている。

第一部第二章では、光濟と朝廷や公家社会との関係を検討した。光濟は当時の公家政権の中心メンバーであった日野家・四条家との血縁を有していたことが明らかにされた。さらに光濟と北朝の後光厳天皇との密接な関係についても言及し、光濟期の獲得所領の多くが皇室領であったことも両者の関係を裏付けるものと結論づけている。

第一部第三章では、南北朝期の醍醐寺三宝院による醍醐寺全体の支配体制の展開過程について検討した。賢俊期には各院家の相承が不安定となった時期に強引に南朝方の院家であると非難することで、醍醐寺内の有力院家の管領権を獲得していたことが明らかとなった。また光濟期には、三宝院と諸院家間の主従関係が、諸院家へ「扶持」（新院主への補任・祈禱の阿闍梨等）を与える段階へ発展したことが明らかになった。また、こうした諸院家への介入は、次代の光助・定忠期には、三宝院院主へ三宝院流定濟方の法流が相承されていない状況に陥ったことで三宝院の正統性はそこなわれ、諸院家の離反や醍醐寺内の混乱を招いたことを明らかにしている。

第二部第一章では、醍醐寺三宝院が大伝法院座主職という所職を介して繋がった紀伊国根来寺との関係を検討した。三宝院による根来寺支配が本格化する室町期には、根来寺内における有力衆徒同士の対立構造の解消が課題であった。三宝院満濟はこのような根来寺内の課題に対し、有力衆徒を寺務代官職へ補任し、権限を集中させることで対応しようとしたが、逆に有力衆徒の没落を引き起こしていた。このような醍醐寺三宝院による根来寺支配の施策が、行人を中心とした中下層集団が根来寺内で台頭する要因となったことを明らかにしている。その後、両者の関係は希薄化するものの、戦国期に義堯が関係を再構築するといった両者の在り方を解明した。

第二部第二章では、鎌倉時代後期より醍醐寺三宝院が相承した伊勢国太神宮法楽寺との関係について検討した。両者の関係は、南北朝内乱という不安定な状況下における他院家との相論に備えようとする賢俊の方針のもとで進められたことを明らかにしている。賢俊は、公武御願のため伊勢神宮代参も担っている。また、法楽寺は、内乱で不安定な情勢にあった伊勢国内、特に伊勢神宮と祭主を支援する目的でも重要な拠点であった。内乱期に

において北朝の祭主家が二つに分裂する中、各々が中央との回路となる三宝院へ接近すること、醍醐寺三宝院が祭主職補任へと介入していく過程が推測できるとしている。

第二部第三章では、河内国八尾にある常光寺の創建について明らかにしている。これまでの研究では、南北朝末期に建立された常光寺の創建期の様子については史料制約もあることから、未解明な部分が多く残されていた。常光寺にも創建期の様子が記された縁起類は所蔵されていたが、近世の写しであるとしてあまり活用されてはこなかった。そこで本章では、常光寺が所蔵する縁起について再検討を加え、縁起が中世に遡る可能性を指摘した。その上で縁起を中世史料として再検討することで、常光寺と中央の公武権力が信仰を介して繋がりを有していたことを明らかにしている。

結論では、本論文のまとめと今後の課題を示している。

論文審査結果の要旨

本論文は、醍醐寺という真言密教の大寺院の中世後期における展開を実証的に明らかにしており、研究史上もたいへん意義ある成果である。醍醐寺文書は、明治時代以来、その重要性は知られていたが、古文書・古記録・聖教とその点数は膨大なもので、一部が『大日本古文書 醍醐寺文書』のなかで活字として紹介されているものの、その全貌が不明であった。こうした醍醐寺文書の目録が、2000年以降、次第に公刊され主要な中世文書が納められている100函までの目録を容易に検索できるようになった。本論文は、こうした史料公開状況に素早く対応して、研究を深めたものである。

醍醐寺の発展は、足利尊氏と三宝院主賢俊、足利義持と満濟との関係によってこれまで説明されてきたが、本論文第一部第一章・二章によって、足利義詮期に活躍した光濟の重要性が明らかにされた。足利義詮の時代は、南朝勢力も力を持った時代であり、この動乱期を光濟は、見事に乗り切り、三宝院と室町幕府の関係を密接にした。同時に、光濟は日野家・四条家と血縁関係を有し、北朝との政治案件の取り次ぎ役として活動したことを実証的に明らかにした。中世政治史と寺院史の密接な関係を示したことは注目される。

また、密教は法流の相承を重視するが、醍醐寺内の三宝院、報恩院など主要な院家における法流相承の乱れと政治的な力関係の形成を明らかにしたことは注目される。

中世の京都・奈良の大寺院は、膨大な荘園を有し、大衆といった武装勢力を編成して、権門として力を持ったが、地方との関係は荘園制の面から説明されることが多かった。これに対して、本論文では、根来寺といった地方における大寺院と醍醐寺三宝院の座主職を介した関係性を考察して、その成果と蹟きを明らかにしている。中世における本寺末寺関係は、近世の本末制とはかなり異なった性格を持ち、こうした宗教制度史的な側面でも本論文の成果は評価される。

三宝院と伊勢法楽寺との関係も、中世の伊勢神宮は近代とは大きく異なり、仏教の影響下にあり、祭主家も熱心に僧侶との関係を取り結んだ。こうした状況の一端を明らかにし

ようとしたことは今後の研究の基礎となり得る。

河内国常光寺と地藏信仰の論考は、地方に伝来した縁起類が、写本自体は近世のものであっても、諸史料とつき合わせると中世の実態を反映したものであることを論証しており、地道な史料収集の成果といえる。

こうした、実証的な論文の数々であるがいくつかの問題点もある。まず、三宝院主の動向はずいぶん明らかになったが、中世後期における醍醐寺全体の組織体制が、鎌倉時代からどう変化したのかが明確にされていない。根来寺との関係も、地域における行人といった在地領主層出身の僧侶のたちの活発な動きが論の中できちんと位置づけられていないことが課題として残る。こうした問題については今後の検討が期待される。

以上、全体としては中世後期における醍醐寺三宝院主が武家・公家社会と密接な関係を構築して、政治・社会的にも重要な働きをしたことを明らかにしたことは評価できる。中世寺院の中でも南北朝・室町時代に高い地位を占めた醍醐寺が、如何にして主導的な立場を獲得したのかがより明瞭になり、宗教史・寺院史研究の上でも注目される研究である。

よって、本論文は博士論文として価値あるものとして認める。